

次取吉日爲正殿心柱造奉率宇治大内一人諸内人等戸人等入杣木本祭用物注左其柱名號稱忌柱

鐵人形四十口鐵鏡四十面鐵鉾四十柄略

〔延喜式四伊勢大神宮〕採正殿心柱祭鐵人像鏡鉾各卅枚

〔榮花物語初花〕かくてりんじのまつりになりぬつかひにはとの、權中將藤原道長子教いで給、その

日は内の御ものいみなれば、とのもかந்தちべもまひ人の君たちもみなよひにこもり給て、うちわたりいまめかしげなるところあり、との、うへ妻倫子もおはしませば、御めのとの命ぶもおかしき御あそびに、めもつかでつかひのきみをひとへにまぼりたてまつり、かくてこのりんじのまつりの日、藤宰相成の御隨身ありし宮のふたを、このきみの隨身にさしとらせていにけり、ありしはこのふたにまろがねのかみいれて、沈のくし、白がねのかうがいをして、つかひのきみのびんかき給べき具とおぼしくてまたり、このはこのうちに、でいて蘆手をかきたるはありしかへしなるべし。

日かげぐさかやくほどやまがひけんますみのかみくもらぬものを

〔倭訓栞前編十一〕まどき 蝦夷の女は頸に銀鏡をかけて飾りとす、是をまどきと名づく、

〔續日本紀二十七〕天平神護二年七月己卯中散位從七位上昆解宮成、得似白鐵者、以獻言曰、是丹波國天田郡華浪山所出也、和鑄諸器、不弱唐錫、因呈以眞白鐵所鑄之鏡、其後授以外從五位下、復與役採之、單功數百、得十餘斤、或曰、是似鉛、非鉛、未知所名、時召諸鑄工、與宮成雜而鍊之、宮成途窮、無所施、姦然以其似白鐵、因爭不肯伏、

〔新千載和歌集九釋教〕後二條院かくれさせ給ての比、彼水精の御かみをつかはされて侍けるを、七日光明眞言の法を行て返しわたし奉るとて、

前大僧正禪助